



# 文学空間

モーリス・ブランショ

# 文学空間

モーリス・ブランショ

栗津則雄  
出口裕弘

訳

現代思潮社

文学空間 ©

定価 1200 円

1962年 10 月 15 日 印刷

1962年 10 月 20 日 発行

著者 / M・ブランショ

訳者 / 粟津則雄・出口裕弘

発行者 / 石井恭二

発行所 / 株式会社現代思潮社 東京都文京区大和町 3

電話 / (813) 1859 振替 / 東京72442番

本文印刷 / 第一印刷

装本印刷 / 形成社印刷

製本 / 神田橋本製本

装幀 / 駒井哲郎

(落・乱丁本はおとりかえいたします)



	I	本質的孤独	7
	II	文学空間の接近	31
		マラルメの経験	35
	III	作品の空間と作品の要請	53
		I 作品と彷徨する言葉	55
		II カフカと作品の要請	64
	IV	作品と死の空間	107
		I 可能的な死	109
		II イジチュールの経験	141
		III リルケと死の要請	158
		I 正しい死の探求	160
		A おのれ自身に忠実な死	161
		B 死に忠実に死ぬこと	171
		2 死の空間	178
		3 死の変質	201
	V	靈感	225
		I 外部 夜	227
		II オルフェウスの注視	240

III	靈感	靈感の欠如	249
VI	作品と伝達		265
I	読む		267
II	伝達		278
VII	文学と本源的体験		293
I	芸術の将来と問題		295
II	芸術作品の諸性格		310
III	本源的体験		331
	補遺		355
I	本質的孤独と世界内の孤独		357
II	イマジネール 想像上のものの二つの解釈		361
III	眠り 夜		377
IV	ヘルダーリンの旅		384

訳 註

あとがき

Title : L'espace littéraire

Author : Maurice Blanchot

Originally copyrighted by Librairie Gallimard

*This book is published in Japan by arrangement with  
Librairie Gallimard through Bureau des Copyrights Français*

たとえ断片的な書物であっても、書物というものは、それを引寄せるひとつの中心を持っている。それは固定した中心ではなく、その書物の圧力や、その構成の持つ種々の状況によつて、移動する。またそれは、固定した中心でもある。それが真の中心なら、それは、つねに同一でありつつ、ますます中心的な、かくれた、不確実な、否応ないものになりつつ移動するのだ。書物を書く人は、この中心への欲求と無知によつて書いている。この中心に触れたと感ずるのは、これに達したという錯覚でしかありえまい。何かを明らかにしようとする書物の場合、それがいかなる地点に向うと思われるかを述べるのが、方法上の誠実さというものだ。この書物の場合は「オルフェウスの注視」と題された一節に向かうのである。





I  
本  
質  
的  
孤  
獨



孤独という語が何を示そうとしているかを体験するとき、われわれは、芸術について、何ごとかを字び知ったと言えるだろう。この語は、ひどく濫用されてきた。ところでいったい、「孤独である」とは、何を意味するのか？  
いつ、ひとは孤独なのか？ このように自問することは、われわれを、あれこれ悲愴大仰な意見に連れ戻すとは限らない。この世の段階での孤独とは、ひとつの傷であり、それについては、ここで、あれこれあげつらう必要はない。

更にまた、われわれは、芸術家の孤独、芸術家とその芸術活動を営むのに不可欠といわれているあの孤独を、目ざしているわけでもない。リルケは、ゾルムス・ラウバツハ伯爵夫人に、こんなことを書いている（一九〇七年八月三日）。「何週間も前から、私は、二度ばかりちょっと中断されたほかは、ただの一言も口にしませんでした。遂に、私の孤独は閉じ、私は、果実のなかの核のように、仕事に没頭しています。」この場合、リルケの語る孤独は、本質的には、孤独ではない、それは、精神集中スピリチュアル・コンセンなのだ。

## 作品の孤独

芸術作品、文学作品などの、作品の孤独は、われわれにより一層本質的な孤独をあらわにする。それは、個人主義の自己満足的な孤立を排し、差異の追求も知らぬ（訳註<sup>1</sup>）。昼という制御されたひろがりやを蔽う何らかのつとめに従事して、ある男らしい関係を保持しているという事実も、この孤独を消散させはせぬ。作品を書いている者は、隔離されており、書いてしまった者は、解雇されている。その上、解雇されていながら、そのことを知らぬ。この無知が、彼を守り、彼の気をまぎらせ、根気よく仕事を続けることを許すのだ。作家は、作品が出来あがっているかどうかを、決して知ることはない。彼は、或る書物のなかでやり終えたことを、別の書物のなかで、再び始めるか、破壊するかする。ヴァレリイは、作品において無限が占めるかかる特権を讃えているが（訳註<sup>2</sup>）、やはりまだ、そのもっとも容易な面しか見ておらぬ。つまり、作品が無限であるとは、彼によれば、芸術家は作品を終らせることは出来ぬにしても、作品を、ある限らない作業が行われる閉じた場とはなし得るとい意味だ。この作業の未完結的性質が精神の支配力を発展させ、それを表現するのだ、能力というかたちで発展させることによって表現するのだ。そして或るとき、種々の事情が、つまり歴史が、出版者とか、金の必要とか、世間的なつとめとかいう姿で立現われて、欠けていたその終末を語りつける。そして、芸術家は、或る全く強制的な解放によって自由となり、他の場所、この未完結のものを、追求するのだ（訳註<sup>3</sup>）。

このように見れば、作品の無限とは、精神の無限にほかならぬ。精神は、無限の作品や歴史の動きのなかでそれを実現することではなく。ただひとつの作品のなかでおのれを成就することを欲する。だが、ヴァレリイは、英雄ではなかった。一切について語り、一切について書くのを、良しと見なした。かくして、この世という散り散りの全体が、作品という唯一の全体の持つ厳密さから、彼の注意を外らせるのだが、彼は既に、愛想よく、それから

外れるがままになっていたのだ。思考や主題の多様性の背後には、等々エトセトという語が、潜んでいたのだ（訳註4）。

ところで、作品——芸術作品、文学作品——は完結してもおらず、未完結でもない。作品は、存在している。作品が語るのは、もっぱらそのこと、つまり、それが存在しているということであり、——それ以上の何ごとでもない。このことを別にしては、作品とは何ものでもない。作品にそれ以上を表現させようとする者は、何ものも見出さぬ。または、作品が何ものも表現せぬことを見出す。作品を書くとか読むとかして、作品に依存して生きる者は、存在キズルするとう語しか表現せぬものを持つ孤独に属する。言語は、この語を、偽装させて包みかくしているかあるいは、作品の沈黙せる空虚のなかに自ら姿を消すことによって、この語を出現させるのである（訳註5）。

作品の孤独を形づくる第一の骨組は、かかる、要求の不在であり、この不在が、作品が完結していると未完結だとか言うことを許さない。作品は、何の証拠もなく存在し、また、何の用途もなく存在する。作品は、おのれを、真実と証しすることはない。真理が、作品をとらえることは出来るし、名声が、作品を照らし出しはする。だが、かかる現実存在は、作品とは何のかかわりもなく、かかる明証性は、作品を、確かにも、現実的にもしない、それを、明白なものにもしないのだ。

作品は孤独である。これは、作品が伝達不可能だとか、読者が欠けているとかいう意味ではない。そうではなくて、作品を読む者は、作品を書く者が作品の孤独の冒険に属しているように（訳註6）、作品の孤独のかかる断言のうちに入りこむのである。

## 作品 書物

かかる主張が、われわれを何ごとに導くかを、更に間近く考察しようと思うなら、おそらく、それが何に由来す

るかを、追求しなければなるまい。作家は、一冊の書物を書く。だが、書物は、まだ作品ではない。作品は、作品を通して、作品に固有な始まりの烈しさのうちに、存在エトボルするという語が発言されるとき、はじめて作品なのだ、つまり、作品が、それを書く人と読む人との内的なつながりである場合に果される出来事なのだ。だから、このようにおのれに問い得るだろう。もし、孤独が、作家の冒険であるならば、その孤独は、作家が、書物というかたちでは、常に、その代替物やそれへの接近やその幻影しかとらえられぬ作品というものの、開かれた烈しさの方へ向けられ方向づけられている事実を、表わしているのではないだろうか、と。作家は、作品に属している。だが、作家に属しているのは、一冊の書物にすぎぬ。不毛の語の黙々たる堆積、この世でもっとも無意味なものにすぎぬ。作家も、この空しさを感じはするのだが、作品が未完結だと思っただけだ、そして、もう少し仕事を続け、好機が訪れば、自分は、自分ひとりで、その仕事に結着をつけ得るだろうと思う。かくして、彼は再び作品にとりかかる。だが、彼が、自分だけで終らせたいと思っっているものは、相も変らず、終らせ得ぬものままであり、彼を、幻を追うような仕事にしばりつけている。そして、作品は、結局、彼を知らず、そして、作品は存在しそれ以上の何もでもないという、非人称的な、何の名前も持たぬ断言のうちに、その不在性の上に再び閉じる。人々は、このことを解釈して、芸術家は死ぬときにはじめてその作品を終らせるのだから、決しておのれの作品を識らない、と指摘する。おそらく、この指摘は、逆転させねばなるまい。なぜかというに、作家自身、この上なく異様な無為(déseouvement)を覚える時に時おり予感しているように、作家は、作品が存在してからあとは、死んでしまっているのではないだろうか(原註)。

われを読むなかれ（訳註ア）

この同じ状況を、次のように言いあらわすことも出来る。つまり、作家は決して己れの作品を読まぬ、と。作品とは、作家にとって、読み得ぬものである、ひとつの秘密であって、彼は、それに向いあっておれないのだ。ひとつの秘密だというのは、彼が、それからへだたられているからだ、だが、この読み得ぬという性質は、純粹に否定的な動きではなく、むしろ、われわれが作品と呼ぶものに対して作者がなし得る、唯一の現実的な接近だ。「われを読むなかれ」というきびしい言葉が、まだ一冊の書物しかない場所に、既に、ある別の力に支配された地平を出現させる。これは、直接的だが、とらえがたい経験だ。これは、なんらかの禁令の力ではない。語の働きと意味とを通して行われる、執拗な、荒々しい、胸をさすような断言だ、ある決定的なテキストとして、余すところなく現にそこにあるものが、それにもかかわらず己れを拒んでおり、拒否の荒々しくきびしい空虚さであり、そのテキストを書いたあと読むことで再びそれをとらえようとする者を無関心の權威をもって排除する、という断言だ。この

（原註）かかる状況は、働く人間、己れのつとめを果す人間、果された仕事がこの世の中で変形しつつその手を離れ去る人間、そういう人間が置かれた状況ではない。そのような人間がなすことは、変形しはするが、それはこの世の中でのことであり、もし、疎外が不動化したり、何人かの利益のために歪められたりせず、この世の働きの完成するときまで、続けられるならば、その人間は、己れのなしたことを、この世を通して再び手に入れる。少くともその可能性はある。ところが作家が目ざしているのは、これとは逆に、作品であり、また、彼が書くのは、一冊の書物である。書物は、かかるものとして、この世の実効ある一事件とはなり得る（だがこれは、常に留保が附された不十分な行動だ）。だが、芸術家が目ざしているのは、行動ではなく作品である。そして、書物や作品の代替物たらしめるものは、書物を、作品と同様、この世の真理に属さぬ物に、作品の現実性もこの世での真実の働きの真面目さも持たぬのだからその意味でほとんど空しい物に、化するに足りるのである。



読み得ぬという性質は、創造によって開かれた空間に今はもはや創造のための余地はなく——また、作家にとっては、相変らず作品を書き続ける以外の可能性はない、という発見である。作品を書いた人は、誰ひとり、作品のそばで生き、作品のそばにとどまることは出来ぬ。作品とは、彼を、解雇し、除去し、彼を、生残りに、無為の人 (désœuvré) に、なすべきことなき人間に、芸術が何ら依存するところなき無力な人間にする決定そのものだ。

作家は、作品のそばに留まることは出来ぬ。つまり、彼は、作品を書くことしか出来ぬ、作品が書かれたときは、「われを読むなかれ」というきびしい言葉のうちに、作品の接近を聞きわけることが出来るにすぎぬ。そして、この言葉が、彼自身を遠ざけ、分離す (écarter)、あるいは、彼が、おのれの書くべきものの了解者となるために、最初に入りこんだ、あの「離隔」(écart) に立戻ること強いるのだ。かくして、彼は再び、自分がいわばその仕事の発端にいるのを見出す、また、再び、おのれが、滞留の地となし得なかつた外部の、ま近さ (訳註) と、彷徨の支配する (errant) (訳註) 内奥とを見出すのだ。

この吟味は、おそらく、われわれを、われわれが追求しているものの方へ向けてくれるだろう。作家の孤独、彼の冒険にほかならぬこの状態は、この場合、彼が、作品のうちにありながら、常に作品より以前に存在しているものに属していることに由来するだろう。作品は、作家によって到来し、また、作家によって、それは、始まりの持つ確かさとなる。だが、作家自身は、再開始の非決定性が支配する時間に属している。彼はある特別のテーマに結びつける執念、既に言ったことを、時には豊かになった才能の力をもって、だがまた時には異常に貧困化した冗慢な繰返しによって、そして常により力弱くより単調に、繰返し語ることを強いる執念は、おそらく、彼がとらえられているあの必然性、つまり彼が同じ地点に立戻り、同じ道を再び通り、彼には決して始まらぬものを再び始めながら根気よく仕事を続け、出来事の現実にはなくそのかげに、対象にはなくイメージに、また、語そのものを